社会　　就職難は天与の好機

私は易者ではない。ましてや将来を予測する能力も異能も持ち合わせてもいない。しかし、季節には春秋、暦には満月と朔月があるように、どうやら人の一生にも陰陽があるらしいと思うようになった。つまり、医学用語で長期、短期とはあるがバイオリズムといわれるもので、生涯の中では誰にも順調時と低迷時のあることをぼんやりと知ったのである。

現在は就職氷河期などと云われ、求職者には心労の多い時代を迎えている。自分の卒業時に、よりによって悪い時代に遭遇してしまったと嘆いている人も少なくないと思われる。友人や知人の中には、大企業に早々と内定した人もいれば、卒業を過ぎた日まで悪戦苦闘した人もいるに違いない。これは運命や宿命ではない。

サムセング、グレートの存在を認める私は、天への畏敬を忘れことはないが、自分の人生は自分の意志と努力で切り開いて来たと思っているからである。私は中学卒で世の中に出ることになった。しかし、十五歳の少年にすぐ職場を与えるほど、世の中の景気は良くなかった。就職組で安定した大企業に就職できたのは、成績の良いほんの一握りの人たちだったのである。ほとんどの人は見習いか走

り使いで、私もその一人であった。それでもこれからは、もう少し学力が必要だと考え定時制高校の夜間部に入ったのである。そこで私よりも逆境の中にいる強い精神力を持った同世代の友人たちに出会い、励まされ雲ををつかむような夢を語り合ったのである。

「将来は大学へ行こう。最高学府がどのようなところなのか見て知って学んだら、将来の職業なんて何でもいいじゃないか。精神を太らせたら何にでも耐えられるはずだ。職業に貴賤はない。土仕事でも油まみれの仕事でも、誇りさえ持っていれば人生は光輝くはずだ」青年らしく理想を越え、遥かな遠い星をつかもうとしていた。

私には二人の心許せる仲間がいたが、やがて、お互いは四年間のズレは生じたものの、それぞれに紆余曲折を経て大学へ進学した。一人は歯科医師となり、一人は零細企業を国際的に飛躍させ、計量器の名門に仕立てた人物となり、私は教員の道を歩くことになった。

我々が順風の時代に青年期を迎えていたなら、自分たちの魂は今よりもやせ細ったものだったに違いない。荒波が小石を丸くするように、大風が枯葉を吹き飛ばし春の新芽を育てるように、すべては我々を一人前にするための試練であったのだ。中学卒業時、大風にも揺れることはないと思われていた大企業に就職できた人は、後年

転勤や出向におびえ、歯車のひとつとして勤めを終わった人もいたのである。

企業の規模にこだわらず、世の為、人の為、夢の為を軸に、新しい視点で就活をしてみてはいかがであろう。勤勉と誠実な生活を蓄積しておけば必ず好機は巡って来るものである。これは多くの人々の生き方と充実した人生の軌跡から確信を持って言えることである。花は希望に支えられた意志さえあれば、必ず咲くものである。それらの花は、人々に愛でられる大輪の花ではなく野辺の小さい花であっても、そこに意志と信念が含まれているならば、深く趣のある色合いになることは間違いないと断言できる。

今、新社会人となる若い人々は、周りからどのような励ましや成功談を耳にしても希望と不安の入り混じった複雑な心境であろうと思う。でも、この道は、多くの先輩たち、いや、かつてはご両親さえ迷いながら通った価値ある未踏の道なのである。従って、私の経験談や訓話などは渡石（わたりいし）にもならないであろうと考え、普遍性を持つ、四百年ほど前、中国の「明（みん）」という時代に書かれた「菜根譚」の箴言を紹介したい。紙面の関係で原文は省略し、私訳の趣旨だけを紹介することにする。

一、　人としての在り方を最も大切にせよ。不遇も幸運も長続きはしない。

二、　世故にたけるよりも、愚直であれ。権謀術数を使わないのが高尚な人物である。

三、　他人の注意、忠告は素直に聴くこと。これらは自分の将来に必ず結びつく。

四、　達人とは平凡なことを確実に出来る人を云う。

五、　折に触れて、自分を客観視せよ。自分の真の姿は自省からしか生まれない。

六、　失敗は成功の出発点。幸と不幸は循環するものである。人生は楽しく愉快なものと思い続ける。

七、　驕(おご)らず高ぶらず常に弱者の立場に立つ。物事は一歩退いて人に道を譲る。

八、　利益には人より先に飛びつかない。善行は人に遅れをとらない。

九、　議論や意見に違いがあった時、相手を最後まで追い詰めず相手の逃げ道を用意して置く。

十、　志は大切であるが、野心は持たないこと。出世の冠は取

りに行くものではなく、天から与えられるものと考える。

等など・・・

これらの重い言葉は続くのであるが、あとは経験の中から自分で考え出して欲しい。人生とは苦楽の中で過ごす厄介で難しいもののように見えるが、考えようによっては、あなた方が将来の日本の命運を握っているのである。どうかあなた方の手で日本史に希望ある一ページを書き加えて欲しいと願う。